

『懷風藻』刊本の研究

沖 光 正

一、序

『懷風藻』の刊本は大きく二種類に分類できる。一つは「群書類従本」であり、いま一つは「無刊記本」より増補改訂を経て「寛政刊本」に至る流れである。この後者の刊本は長澤規矩也氏の分類によれば、次の五種類になる。^(註①)

- 一、無刊記本
- 二、天和四年本
- 三、宝永二年本
- 四、寛政五年本
- 五、大正中印本

右の内一〜四の刊本はいずれもその版木を一にしており、「大正中印本」以外は「無刊記本」の版木をそのまま流用し、そのつど増補改訂をくりかえして「寛政五年本」に至

っているのである。従って、何年本という呼称は正確ではなく、長澤規矩也氏の言を借りれば書誌学的には「何年修本」の呼称が正しいことになる。

さて、右のうち「大正中印本」はその名の示す通り、大正時代に現代も京都に残る佐々木竹苞樓において「寛政五年修本」の忠実な複製を作成し、出版したものであって、オリジナルの版木を使用したものではなく、覆刻本である。因みに、現在竹苞樓に残る『懷風藻』の版木は蔵の水漏れ等により、完全な状態ではなくなっているという。

従って右の一〜四までの刊本が本稿の研究対象となる。尚、便宜上、それぞれ「無刊記本」「天和本」「宝永本」「寛政本」の略称を使用する。

本稿を著す所以は、『懷風藻』に於いてはその本文の研究が他の上代文学に比べて著しく立ち遅れているからに過ぎ

ない。近年の比較文学の興隆を考えると、『懷風藻』については今だに校本一つなく、また刊本の調査も満足に行われてはおらず、その一方で注釈書における本文の校異に右の三種類の刊本が使用されているという矛盾に対して、稚拙ながら一考察する次第である。

以下、刊本について述べていくのであるが、文字の異同等について、その位置を記す方法として次の通りとする。

『懷風藻』本体は「序」「目録」「本文」それぞれ版心に丁数が入っているので、位置を示す場合にはその丁数を利用し、「序1ウ・8・2」のように記す。これは刊本の「懷風藻序」の一丁目の裏側、八行目の二文字目を示す。又、「本文8ウ・1・9」の場合には本文の八丁目の裏側、一行目の九文字目から十三文字目を示す。尚、刊本の本文は凡て一面八行十八字であって、詩題の場合二文字格下げ（低二格）、詩序の場合一文字格下げ（低一格）で記されているが、その場合も低二格・低一格を員数に含めて計算する。

註(1)、長澤規矩也氏「日本漢文学資料とそれに関する図書学の問題」『日本漢文学史論考』（昭和四十九年 岩波書店刊）所収。

(2)、本文の校異としては「寛政本」を定本に十三本の校合

をした大野保氏の『懷風藻の研究』（昭和三十二年 三省堂刊）がある。

二、刊本について

管見によれば、「刊本」についての最初の記述は『日本古典全集』（大正十五年刊）に於ける『懷風藻』の解説が一番早い。日本古典全集本の『懷風藻』は底本に「宝永本」を用い、「群書類従本」を参照としているが、この当時は鶴飼、山脇と云ふ二人の篤學者の梓行した本が最初であるが、其れはまだ我の探尋する範囲では見當らない」として「無刊記本」は勿論のこと「天和本」についても「寛政本」についても言及されてはいない。しかし、大正十一年三月に印行された神宮文庫の蔵書目録には、「懷風藻 近江三船編 天和四刊 一冊」とあるから、これは探尋不足であったということであろう。

その後、岡田正之氏の『日本漢文學史』（昭和四年刊）に天和・宝永・寛政の各刊本についての略述があるが、これを読む限りにおいてはそれぞれの刊本は別版による出版として受け取っている感がある。

昭和八年『懷風藻』の現代における注釈書としては最初の『懷風藻註釋』が澤田總清氏によって上梓され、「天和本」には缺字が多く、寶永本・寛政本に至って齊整されてある

と言う記述から判るとおり、此の三本が同一の版本による印刷であることが示された。

そして昭和二十九年に岡田正之氏の『日本漢文學史 増訂版』において始めて「無刊記本」の存在が示されたのである。その注として長澤規矩也氏は、

校者按ずるに、懷風藻の天和刊本には同板無刊記の刊本ありて、有刊記本よりも印刷先にあり、故に、天和刊本といはるゝものは實は天和以前の刊本か。以後の兩本はこの補修本なり。別版に非ず。

と記している。長澤規矩也氏は、その後も『懷風藻』の「無刊記本」について述べており、「無刊記本」が「有刊記本」よりも早く出版されている事例がいくつもあることを証明し、その一例として『懷風藻』の「無刊記本」の存在を明確にした。^(註2)

その後の刊本に関しては田村謙治氏の論考がある。^(註3)その内容を概説すると、天和三年以前に「無刊記本」が出版されていたと推定し、「天和本」に一冊本と二冊本があると示されたのである。

尚、『古典籍総合目録』を見ると、「寛永二版」・「天和四版」・「宝永二版」・「寛政五版」と「その他」に分類されており、伝習館文庫に蔵する一本が「寛永二版」となっているが、これは実際には「寶永」を「寛永」に誤読したもの

であつて実際には「宝永二版」のことである。^(註4)

さて、刊本と他の写本とを比較すると大きな本文の異同がある。それは「葛野王」の小伝の部分で「本文6ウ・ニ・3・18」と「本文6ウ・三・3・18」とが他の写本類では入れ換わっていることである。即ち、刊本では、葛野王の小伝の部分が、

以此典仰論天心誰能敢測然以人事推之
從來子孫相承以襲天位若兄弟相及則亂
となつているのが、他の写本においては、

以來子孫相承以襲天位若兄弟相及則亂
從此典仰論天心誰能敢測然以人事推之
となつているのである。

さて、どちらが正しいかということでは置いてお

くとして、問題は後者と同一の本文を有する写本が『群書類従本』を含め、非常に多いということである。一方刊本と同じ本文を持つ写本には『紀州家本』（東京大学図書館蔵）・『河野本』（河野信一記念文化会館蔵）・『岩瀬文庫本』（西尾図書館岩瀬文庫蔵）の三本が有る。但し、『河野本』と『岩瀬文庫本』の二本は一面の行数・字詰など一見して刊本の模写であると判るが、『紀州家本』はその奥書に「或人齋西三条實隆定本示予其書其淨潔真絶也書中闕字衍文皆弥縫只藤万里詩僅闕一両字道融詩載二首別有一詩其姓字無

亦是非後人之言蓋先民之作干時元祿十七年春正月書」とあり、「西三条實隆定本」によって校合されたと考えられる。筆写にあたっては字体・送り仮名等により「天和本」が使用されており、奥書から「天和本」の墨格を「西三条實隆定本」をもとに埋めながら書写したものと受け取れる。

従って、刊本は独自の本文を有すると言えよう。尚、この箇所は「寛政本」まで訂正されてはいない。すなわち、「天和本」以降、凡そ百年に渡って修正されていない訳で、ここまでこの本文に執着した事に興味を覚えるものの、その訳は不明とせざるを得ない。また、「刊本」において丁度となりあつた二行が入れ換わっているということにも非常に興味をひかれる。共に後考を要する問題であろう。

註(1)、長澤規矩也氏「日本漢文学資料とそれに関する図書学の問題」『日本漢文学史論考』(昭和四十九年 岩波書店刊)所収。

- (2)、長澤規矩也氏前掲書。
 (3)、田村謙治氏「懐風藻の基礎的研究(諸本について)」『城南紀要』第六卷・「懐風藻研究史(江戸版本の書入れについて)」『城南紀要』第八卷・「大東急記念文庫蔵 椋斎校本懐風藻について」『かがみ』第十二号。
 (4)、『伝習館文庫蔵書分類総目録』に注記として「京萬屋 喜兵衛 松崎祐序 山重顕跋」とあることから「宝永

本」に間違いない。

三、刊本の構成

先ず、参考までに「無刊記」「天和」「宝永」「寛政」の各刊本の構成を示すと次のようになる。

	無刊記本	天和刊本	宝永刊本	寛政刊本
懐風藻序	懐風藻序 (二丁)	懐風藻序 (二丁)	懐風詩集序 (二丁)	懐風詩集序 (二丁)
懐風藻目録	懐風藻目録 (五丁)	懐風藻目録 (五丁)	懐風藻目録 (五丁)	懐風藻目録 (五丁)
本文	本文 (四十五丁)	本文 (四十五丁)	本文 (四十五丁)	本文 (四十五丁)
		題懐風藻後 (二丁)	題懐風藻後 (二丁)	題懐風藻後 (二丁)
				懐風藻跋 (二丁)

「題懐風藻後」「懐風詩集序」「懐風藻跋」と版元が変わるごとに追加され「寛政本」へと至るわけである。従って、刊本の構成を見れば刊記が無くても何時の刊本か判明できる。

今は取り敢えず、それぞれの書誌学的な解説に留めておくことにしよう。

送り仮名を付す。

(6) 懐風藻跋(二丁)

- (1) 懐風詩集序(二丁)
「松崎祐」の著。一面六行十三文字。四周単辺。この「懐風藻詩集序」のみ界線有り。版心は白口。魚尾無し。文字は行書で返り点・送り仮名を付す。
- (2) 懐風藻序(二丁)
一面八行十八文字。四周双辺。此の形式は目録・本文と同じである。版心は白口。黒魚尾。「懐風藻叙」と有り、乙、二の丁数が入る。
- (3) 懐風藻目録(五丁)
懐風藻序と同じく一面八行十八文字。四周双辺。版心も同じ。「懐風藻目録」と有り。乙より五までの丁数が入る。
- (4) 本文(四十五丁)
序・目録と同じく一面八行十八文字。四周双辺。版心は序・目録と同じ。「懐風藻」と入る。乙より四十五までの丁数が入る。
- (5) 題懐風藻後(二丁)
「山重頭」の著。一面八行十五文字。四周双辺で、版心は本文と同じく白口。黒魚尾。本文に続いて四十六の丁数が入る。文字は肉太の楷書で、返り点・

「阮秋成」の著。一面七行十四文字。跋本文の最終行のみ低一格を含め十五文字。四周単辺。文字は行書で、返り点・送り仮名を付す。版心は白口にして魚尾無し。丁数は「題懐風藻後」に続いて四十七・四十八と入る。

四、刊本の成立

「懐風詩集序」「題懐風藻後」より刊本の成立過程を窺ってみる。

先ず、「山重頭」の「題懐風藻後」であるが、これによると「儒臣眞之雅士(風雅に志ある人)懐風藻を得て、しかうして異本を校讎し(しらべあはせ)、訛謬を摺糾して(あやまりをひろひただし)、蠅頭は點分れ、蠶絲は、義析る。(細字は、はつきりし、蠶と絲と本末の義理明かになつた。しかし)なほその舊によつて(もとのまま)、強ひてすなはち改めず。以て善本の出づるを待つ。」とある。^(註①)眞之とは「懐風詩集序」にみられる鶉飼石齋であろうと言ふ。^(註②)鶉飼石齋は「名信之。字子眞。號心耕子。通稱石齋。江戸人。」^(註③)「以元和元年乙卯正月十五日。生於江戸神田」。後京都に遊学し那波活所に受業し、その塾に居ること数年で「精通

五經。旁搜百氏」すと言ふ。正保三年、尼崎侯（青山大膳亮）に招致され尼崎に移り住む。時に歳三十二。萬治三年、祿を辞して京都に戻り、山崎闇齋・毛利貞齋と名声を等しくする。常に書肆の請う所に応じて諸書を校訂し、国読訓読（を本文に付して出版させた。「書肆謝以潤筆。受其資料。以給衣食」と言ふ。当時の儒生の講習する所は僅かに四書・五經・近思録・小学・史漢・蒙求等の数種類しかなく、石齋が始めて諸書を翻刻して世に大に行われたと言ふ。萬治寛文の間は学者と雖も、書を獲に艱み、医卜釈老を論ぜず。概ね舶来の書を以てその考援に充てていたと言ふ。その為、翻刻する者も元禄宝永以後、手を下し易きに及ばなかつた為石齋はこの事態を理解し、有用の書の翻刻を先務と爲したと言ふ。その書も「無慮數百千卷皆行于世」と言ふ。石齋は寛文四年の春、病を得、七月二十一日に堀河の茅舎に歿した。時に四十九歳である。このような鶴飼石齋が『懷風藻』の「異本を校讎し（しらべあはせ）、訛謬を撞糾し（あやまりをひろひただし）」たのも納得出来よう。しかし、惜しいかな寛文四年七月、「天和本」の上梓二十年前に歿している。

この「題懷風藻後」を記した「山重顯」は、林古徑氏も「傳は明かでないが、詩書の翻刻に力めた人らしい。元政上人と交友せし人。」^{註④}と言ふ。この「山重顯」は山脇氏、

即ち山脇道円重顯と言ひ、『国書総目録』によれば、『教のひとり』『阿蘭陀流外科書』『増補下学集』『外科良方』『詩法指南』『八陣図説』の著述がある。尚、『近世漢学者伝記著作大事典』に依れば、次のように見える。

山脇 道圓（敬義學）

名は重顯、字は士晦、道圓と通稱す。山崎闇齋の門人。

（儒林源流）

著述

易經蒙引二十四卷（校） 詩經蒙引一卷（校）

詩法指南二卷（校） 軍林一得抄二十卷

懷風藻二卷（校） 増補下学集六卷

八陣圖説一卷 殘義兵的一卷

教のひとり一卷 外科良方一卷 刊

これらの書名から判断すると蘭法の外科医でもあろうか、『詩法指南』があることから漢詩にも造詣があつたのだから。因みに静嘉堂文庫蔵の『増補下学集』の刊記には「長尾平兵衛／開板／寛文九歳／六月吉旦」とある。「長尾平兵衛」は「天和本」の版元である。又、後述するが、『慶長以來賣書集覽』には『増補下学集』の他に『詩法指南』の書名も「長尾平兵衛」の項目に見える。ただ、ここで興味あるのは『懷風藻二卷（校）』とあることである。出典は未詳であるが、これは「天和本」が二冊であつたことを示して

いよう。

「懷風詩集序」は「宝永本」の巻頭に付された「松崎祐」の題した一文である。その文に曰く、「曩昔（むかし）鶴飼山脇二氏、剗剗に授けて印行すでになる（出版發行した）。しかうしてなほ舊による。未だ冗脱異同あることを免れず。今、善本に正して、以てその傳を廣む（廣く流布させる）。」と言う。此の一文によって前出の「眞之」「山重頭」がそれぞれ「鶴飼石齋」「山脇重頭」であることが判明できる。後述するが、「無刊記本」「天和本」は「未だ冗脱異同あることを免れ」ない状態であるが「宝永本」に至って墨格（次章参照）も減り、頭注も付されて「善本に正して」刊行されるのである。その校訂者が「松崎祐」である。「松崎祐」は『大日本人名辭書』によれば、丹波篠山藩士で名は祐之。字は子慶。号して蘭谷という。伊藤仁齋門下で仁齋深く之を器としたと言う。中年の後心を文章に留め、詞美典雅富に流れず時に染まらず、傍ら本草を研究した。享保二十年七月九日、六十二歳で歿している。^{註⑤}『国書総目録』によればその著作は『印譜』『鑑袋』『刀袋』『甘城雜録』『国鑿』『訓彙』『言志集』『古押譜』『五教大意診解』『五倫大意診解』『山陰雜筆』『膝下問答』『清編私考歴史微』『太平開承録』『唐詩河海』『唐宋名家歴代史論奇鈔』『身の上草紙』『蘭谷集』がある。

「懷風藻跋」の阮秋成は上田秋成のこと。林古徑氏によれば「阮」は「ミナモト」と読ませるらしい。又、跋の文は彼が文化元年に脱稿した万葉註釈の『金沙』の内容とも照合する^{註⑥}。

以上を振り返ると、始め鶴飼石齋が志半ばで物故した「懷風藻」版行を山脇重頭が「碧鷄堂長尾平兵衛」より上梓させ、後松崎祐之が校訂を加えて「演古堂萬屋喜兵衛」が出版し、更に上田秋成が筆を加えて「竹苞樓錢屋惣四郎」が出版したという経緯が窺える。

註(1)、林古徑氏著『懷風藻新註』の読みによる。

(2)、林古徑氏、前掲書

(3)、『先哲叢談續編』（明治十七刊）による。以下同じ。

(4)、林古徑氏、前掲書

(5)、『大日本人名辭書』によれば出典として『先哲叢談』を挙げているが、同書には「松崎蘭谷」の項目は無く、何に依ったのか不明である。『懷風藻新註』においても彼については簡略にしか書かれておらず、恐らく『先哲叢談』にも出ていないことから別書に依ったものと思われる。

(6)、林古徑氏、前掲書

五、無刊記本

本稿を記すにあたり、参照とした「無刊記本」は次の二本である。

- (1) 長澤規矩也氏旧蔵本（現長澤孝三氏蔵本）
 (2) 宮内庁書陵部蔵本

長澤規矩也氏旧蔵本は『図解古書目録法』（昭和四十九年及古書院刊）に写真の収載されている一本で、横一六二ミリ縦二七〇ミリ。灰色の地に山水模様の紙表紙の四針袋綴で墨書の「懷風藻」の題簽を持つ。本文は極美本で後人の書き込み一つ無いが、他に同一の本が無い以上、表紙については書外題ということもあり、装訂しなおした可能性もある。

宮内庁書陵部蔵本は横一五九ミリ縦二七四ミリ、表紙は薄灰色の地に茶の縞模様（渋引表紙と思われる）で、五針袋綴である。長澤規矩也氏旧蔵本との相違は次章に述べる「天和本」と同じ「碧鷄堂」の内題を見返に有していることである。すなわち「無刊記本」には二種類の本があることになり、便宜上、長澤規矩也氏旧蔵本を「無刊記本 甲本」、宮内庁書陵部蔵本を「無刊記本 乙本」と称する。

「無刊記本」は後の刊本と比較して一番簡略な形態を有している。

内容は「懷風藻序」二丁に始まり、「懷風藻目録」五丁、「本文」四十五丁の計五十二丁である。本文中に底本における不明箇所を彫らずに欠字（墨格）とした処が次の二十三箇所あり、甲本、乙本共に同じである。

①	序	1ウ・8・3	⑬	本文	30ウ・5・3
②	本文	8ウ・1・9	⑭	〃	32オ・6・4
③	〃	9ウ・7・15	⑮	〃	32ウ・3・15
④	〃	10オ・8・4	⑯	〃	15
⑤	〃	13ウ・7・16	⑰	〃	33オ・8・7
⑥	〃	14オ・2・14	⑱	〃	33ウ・2・10
⑦	〃	14オ・3・15	⑲	〃	10
⑧	〃	18ウ・3・15	⑳	〃	35ウ・8・10
⑨	〃	18ウ・4・1	㉑	〃	18
⑩	〃	21オ・1・17	㉒	〃	15
⑪	〃	21オ・2・1	㉓	〃	38オ・2・10
⑫	〃	24ウ・8・14			4

尚、⑰は他と異なり、版木を彫らないままでなく、空白のまま欠字となっている。

この無刊記の二本は出版された時期に於いて明確に前後がある。更に、二本の前後ばかりでなく、「無刊記本」の出版時期についても大体の推定が可能である。

それは田村謙治氏の「天和本」がその刊記に見える天和

四年の出版ではなく、天和三年に出版された『新增書籍目録』の儒書の部に「一 懷風藻」の記載があり、『新增書籍目録』が延宝三年に出版された『古今書籍題林』の増修本であることから「無刊記本」の出版が、天和三年以前であるとの想定である。^{註①} もっとも「書陵部蔵の無刊記本を以て直ちに天和三年以前のものとして断定するにはさらに傍証を必要とする」という同氏の見解には筆者も同感とするところで、甲本は天和三年以前の出版と考えられるものの、「乙本」については次章に述べる「碧鷄堂」の内題があることから天和四年出版の可能性もあると思われる。

尚、「書陵部本」が「無刊記本」であるか否かの判断は、この『新增書籍目録』における「一 懷風藻」の記載以外には無い。「一 懷風藻」とは『懷風藻』の一冊本であるということを示しており、次節の「天和本」の項でも詳述するが、「書陵部本」には二冊を合本した形跡が見られないように思われるからである。^{註②}

因みに天和四年は二月二十一日より「貞享元年」と改元されている。正確な言い方をすれば、「天和本」は天和年間出版されたと言う可能性が薄い。「天和本」の刊記には「天和 甲子 歳正月良辰」とあるから天和四年に出版されたものもあるだろうが、「天和本」の種類を考えた場合、天和四年以降の出版のほうが多いと考えられる。但し、刊記

の年月日と実際の出版年とが異なることは「古言梯」のよいうに明和二年の刊記を有しながら、実際には明和五十六年の出版と考えられている例もあるが、本書の場合概ね天和三年には出版されていたとしてよいであろう。

先に記した通り、甲本には「碧鷄堂」の内題がなく、乙本には有るということでも甲本のほうが出版が早いと考えられるが、それ以外にも次の如き相違が見られるのである。「甲本」と「乙本」とを比較した場合、本文を囲む四周双辺が「甲本」はほぼ完全であるのに対し、「乙本」に於いては、次の箇所欠損が見える。

(1) 1オ・右下 (2) 16オ・右下 (3) 22オ・右中程 (4) 29オ・

右下 (5) 40オ・右下

尚、35ウ・左中程にも枠の欠損が見られるが、これは「甲本」「乙本」共に同じである。従って初校本が無傷とするならば「甲本」以前に一本の存在が考えられるが、現在確認できてはいない。しかし、次に述べる「天和本」に「乙本」と同じ四周双辺の欠損（これらは版木の破損ではなく、故意によるものと見られる）があることや、「天和本」と同じ「碧鷄堂」の内題があることから「甲本」が「乙本」より早印であろうと思われる。しかしながら書陵部本を「無刊記本」とするには今一つ確証が無いということも否めない。何故ならば「天和本」から「題懷風藻後」の一丁を除いて

しまえば、本稿で言う「無刊記本 乙本」と表紙を除いて同じ体裁になってしまふからであり、この点から考えると「甲本」「乙本」共にその可能性が皆無ではないからである。

註(1)、田村謙治氏「大東急記念文庫蔵 掖斎校本懐風藻に

ついて」「かがみ」第十二号及び「懐風藻の基礎的研究 (諸本について)」「城南紀要」第六巻。

(2)、「見られないように思われる」と言葉を濁すのは、現在この乙本が繪裏打の修理を済ませたものであり、合本か否かの判断が出来ないからである。そのため一冊本との判断は乙本の修理以前の複写を詳細に見当した結果でしかない。

(3)、勉誠社文庫 58 『古言梯』。

六、天和四年修本

本書は「無刊記本」に対して、巻末に「山重顯」即ち山脇重顯の「題懐風藻後」一丁が有り、その最後に「天和四年 歲正月良辰 銅駝坊書肆 長尾平兵衛刊行(本文46ウ)の刊記を有している。又、表紙見返に「星彩射斗波瀾 衝山／懐風藻／銅駝坊碧鷄堂繡梓」の内題がある。本の大きさは、横一五七〜一六八ミリ、縦二六五〜二七〇ミリで、後の「宝永本」「寛政本」に較べて大判である。「碧鷄堂」

に関しての詳細は不明であるが、『慶長以来書賣集覽』に次のように見える。

長尾平兵衛 寛文一 元禄 京都二條通烏丸東入

竹取物語 (寛文 三) 韻鏡字子 (寛文 三)

擊壤集 (同 九) 増補下學集(同 九)

本朝書籍目録(同 十二) 呉竹集 (同 十三)

比丘六物圖説(延寶 六) 詩法指南 (延寶 九)

竹取物語 (元禄 五) 日本釋名 (元禄十三)

残念ながら右書には「懐風藻」の名前は見えないが、「無刊記本」乙本に内題が有ることからも「無刊記本」の出版にも関係があったとも考えられる。

尚、田村謙治氏によれば、「本書には一冊本二冊本があり、寓目したものに、(一冊本) 静嘉堂文庫本・書陵部本・岩瀬文庫本・天理古義堂文庫本、(二冊本) 国会図書館本・書陵部本・日比谷加賀文庫本・名古屋鶴舞図書館本・高野山金剛三昧院本・神宮文庫本・三手文庫本等がある」とし、「一冊本は題簽に「懐風藻」「懐風藻全」とあり、二冊本は「懐風藻 金」「懐風藻 玉」とある」とする。さらに「これははじめ一冊本として出し、後に二冊本としても出したのであらう」としているが、実際には次の資料により一冊本の「天和本」は出版されなかったと考えられる。

先に「無刊記本」の出版年で『新增書籍目録』の記載を

引用したが、『江戸時代書林出版書籍目録集成』から『懐風藻』の記事を抜き出して一覧にすると次のようになる。

①『古今書籍題林』 延宝 三年(二六七五)『懐風藻』の記載無し。

②『新增書籍目録』 天和 三年(二六八三)「懐風藻」(①の増修)

③『古今書籍題林』 貞享 二年(二六八五)「懐風藻」

④『廣益 書籍目録』 元禄 五年(二六九二)「懐風藻」

⑤『増益 書籍目録大全』 元禄 九年(二六九六)「懐風藻」

⑥『新板増補書籍目録』 元禄十二年(二六九九)「懐風藻」

⑦『増益 書籍目録大全』 宝永 六年(二七〇九)「懐風藻」

⑧『増補 書籍目録大全』 正徳 五年(二七二五)「懐風藻」(⑦の増修)

右に「一 懐風藻」とあるのは、『懐風藻』が一冊本として出版されたということであり、「二 懐風藻」とあるのは二冊本として出版されたことを示している。尚、天和四年は先に記したように、二月二十一日から貞享元年に

改元される。即ち『古今書籍大林』が出版されるのは「天和本」の出版された翌年ということになる。この僅かの間に「天和本」の一冊本が出されたとは考え難い。

更に、現存している「天和本」の一冊本がはたして本当に一冊本なのかという問題がある。というのも筆者の調べた範囲では完全な一冊本がないからである。例えば書院部蔵本は本文の十八丁目と十九丁目とで本の大きさが異なっており、外題は書外題である。これは明らかに本来二冊であったものを一冊に合本したものである。又、静嘉堂文庫の文庫の一冊本は本文の十七丁目から下巻となる合本であり、国文学研究資料館の蔵する一本は本文の十九丁目から下巻となる合本である。田村謙治氏自身、その論考のなかで、高野山大学蔵本は一冊に綴じ直しているとし、山岸文庫本については「もと二冊か」と疑問を出しておられるのである。尚、田村謙治氏が挙げられた「天和本」の内、岩瀬文庫本は「天和本」ではなく「宝永本」である。

又、「一冊本は題簽に「懐風藻」「懐風藻全」とあり」というが、これは恐らく「懐風藻」は書外題のことであり、「懐風藻全」というのは二冊本の「懐風藻 金」「懐風藻 玉」の内、上巻にあたる「懐風藻 金」の刷外題を見誤ったのではないだろうか。実際、天理図書館蔵の一冊本は「懐風藻 金」の刷外題を有しているからである。従って、「天

和本」の一冊本が短期間しか出版されなかったのではなく、もとより二冊本として出版されていたということになる。

この「天和本」が一冊本か二冊本かの問題で、以上の他に気の付いた事を述べると、二冊の分けかたに三種類あるということである。即ち十九丁目より下巻となる本（書陵部蔵本・国文学研究資料館本）と、十七丁目から下巻となる本（静嘉堂文庫本・都立中央図書館加賀文庫本）があり、神宮文庫本は本文の十六丁目から下巻となっている。これが、版を重ねる度に分けかたが異なったものなのか、同時期の出版の際に分けかたが異なっているのか不明である。

但し、「神宮文庫本」は四針袋綴であり（他の「天和本」は五針袋綴）、装訂の仕直しでなければ出版時期が他の「天和本」と異なることになろう。

尚、「天和本」には鶴舞中央図書館河村文庫に、先に述べた墨格が一箇所少ない一本がある。本文の三十六丁の裏墨格の一覧の⑳の十四文字に「帰遂焉如君道誰云易臣義本自難」が補彫されている。これは「宝永本」と比較すると、同一の書体であり、「宝永本」の発行の前に修補されたことが明かである。この河村文庫本は「宝永本」へと続く興味ある一本であるが、現在のところこの一本以外に所在を知らない。

従って「天和本」においては墨格の総数によって二種類

に大別できる。今、便宜上墨格の二十三箇所の本を甲本、二十二箇所の鶴舞図書館本を乙本と称する。

尚、「無刊記本」「天和本」共に特筆した刊本（岩瀬文庫本）以外に本文の文字の異同は見られない。

註(1)、田村謙治氏「懐風藻の基礎的研究（諸本について）」。

(2)、田村謙治氏「懐風藻研究史（江戸版本の書入れについて）」。

(3)、田村謙治氏「懐風藻研究史（江戸版本の書入れについて）」。

(4)、⑦⑧の「長尾 懐風藻」の記載は「長尾平兵衛」の「碧鷄堂」の出版ではなく、すでに「宝永二年本」が「萬屋喜兵衛」の「演古堂」より出版されているので、正確には「長尾」ではなく「萬屋」でなくてはならないが、逆に「宝永本」が宝永二年に出版されたという確証はなく、⑦⑧の記載が正確であるならば、「宝永本」の出版は実際には正徳五年以降ということになる。後考を要する。

(5)、田村謙治氏「懐風藻の基礎的研究（諸本について）」に一冊本として、静嘉堂文庫本・書陵部本・岩瀬文庫本・天理古義堂文庫本を挙げているが、静嘉堂文庫本・書陵部本は明らかに合本である。尚、天理古義堂文庫本は未確認である。

七、宝永二年修本

「宝永本」になると、「懷風藻序」の前に松崎祐之の「懷風詩集序」一丁を巻頭に置き、「天和本」の刊記を「宝永二乙酉 歳孟春吉辰 京師書肆 萬屋喜兵衛壽梓」と取り替えている。大きさも半紙本となり、横一六八―一七七ミリ、縦二三八―二五四ミリ位になる。本書にも一冊本と二冊本で今に残るが、「天和本」と同じく、一冊本で出版された確証はなく、総て二冊本と考えられる。見返の内題は「本朝古賢名選／懷風詩集／書肆演古堂壽梓」である。

「演古堂」については『慶長以来書買集覽』に、

萬屋喜兵衛 西村氏 演古堂 元禄——享保 京都
押小路通富小路東入 醫書屋

吾妻紀行(元禄十三) 懷風藻(寶永二)

と見える。「元禄——享保」とあるが、凡例に「それだけの間には確に存在して居つたといふ事を、見聞に随つて記入したまで」というから正確には判らないまでも、大体の目安にはなる。後述するが「演古堂」の版本はその後富田屋弥兵衛の手から、「竹苞樓」の錢屋惣四郎へ安永九年に渡るのである。

この「宝永本」においては、頭注が四十七箇所の本と十四箇所の本と二種類が存在する(「懷風藻刊本頭注増減一

覽」参照)。これは本文五ウの頭注「媽或作嬌」・四十オ②の頭注「陽春出朝鮮國」・四十二ウの頭注「乙麻呂本姓物部」の三箇所が削られているのであるが、この内、五ウと四十二ウの頭注削除の際に完全には削られておらず、明らかに二種類の前後が決定出来る。今この二種類の「宝永本」を甲本・乙本として以下に説明を加える。

甲本

四針袋綴。水色紙表紙(菱模様)。二十四丁目より下巻。
題簽は「本朝／懷風詩集 乾」「本朝／懷風詩集 坤」の
刷外題である。

乙本

四針袋綴。紺色紙表紙。題簽は「天和本」と同じ、行書
体で「懷風藻 金」「懷風藻 玉」である。頭注は右記
の通り甲本にたいして三箇所少ない。

先に述べた如く「宝永本」の特徴は、頭注が付けられ、更に本文の文字の訂正及び墨格がかなり減つたことである。(校異表参照) 全体で五十七箇所の修正が見られる。(但し、これは同じ「天和本」でも墨格②の補彫された「鶴舞図書館本」との比較であって、一般に流布している「天和本」と較べれば五十八箇所となる。)この校異に使用された底本と思われる一本が山岸文庫に存在するが、この一本については(註①)いづれ稿を改める予定である。

註(1)、田村謙治氏「懷風藻研究史(江戸版本の書入について)」「城南紀要」第八卷 この一本については平成三年五月、大東文化大学日本文学会の席上に於いて「伊藤坦菴書入本『懷風藻』についての一考察」と題して底本足りえる旨口頭発表した。

八、寛政五年修本

本書は凡て一冊本である。内容も松崎祐之の「懷風詩集序」一丁があり、「懷風藻序」二丁、「懷風藻目録」五丁、「本文」四十五丁、山脇重顯の「題懷風藻後」一丁が有り、更に阮秋成、即ち上田秋成の「懷風藻跋」二丁の計五十六丁となる。刊記も更に取り替えて、先に記した「天和四甲子正月碧鷄堂上梓／寶永二乙酉正月演古堂補彫／寛政五癸丑八月竹苞樓再校」を三行書にした「木記」である。見返の内題は「本朝古賢名選／懷風藻／平安書肆竹苞樓發兌」であるが「宝永本」の「本朝古賢名選／懷風詩集／書肆演古堂壽梓」が使用され、また二冊本の題簽より「乾」「坤」の文字を削除した「本朝 懷風詩集」とした本も有る。大きさは「宝永本」と同じく半紙本で、横一六二〜一八〇ミリ、縦二五二〜二六〇ミリである。

また後見返に「寺町通本能寺前 皇都 錢屋惣四郎」と

印刷された本や「竹苞藏版 寺町通本能寺前 帝都 錢屋惣四郎」と印刷された本も有り、実に多種の本が存在している。

本書に関してはその入手経路についての記録が『竹苞樓大秘録』に残されている。

- 一、萬屋喜兵衛殿手板之中、左之品堪木丁通小川西入南側ニ富田屋弥兵衛殿ト申方ニ所持ニ在之処、安永九子年三月十日ニ彼方ヘ相對參、右富田屋ニ所持之中ハ、下拙方ヘ支配可致ニ治定ニ候、依之即日板賃相窮、此方斗ヨリ摺出シ相對也、則
- 一、病機攝要 丸板廿三丁

外題共二張

(中略)

- 一、懷風藻 丸板

丁附ハ追線附 懷風藻と在之扉

叙 式丁 板賃正味壹部ニ付九分カヘ

序 壹丁

目録 五丁 外ニ八分字袋板

本文四十六丁 艸書ニテ懷風藻と在外題

五十五丁 楷書ニ而懷風詩集と在外題

共板二張

(中略)

右之通、此節有合外ニモ在之よしニ候へ共、知レ
かたし、硯壺ツ有、墨ハなし、安永九年子三月十四
日記之

そして、『蔵板記』には

三夕沓分五厘

一、懷風藻 再校本 羅山先生跋文入
と見える。^(註⑩)

さて、『竹苞樓大秘録』の内容を検討すると、「叙」二丁、
「序」一丁、「目錄」五丁、「本文」四十六丁、合計五十五
丁と言う。先ず、計算が合わない。五十四丁でなければな
らないはずが五十五丁となっている。「叙」と言うのは松崎
枯之の「懷風詩集序」、「序」は「懷風藻序」のことならば
丁数が逆になっている。しかしこれは版木の記録である事
を考えれば「懷風藻詩集序」の版心は「叙」となっており、
記録としては正しい。「懷風詩集序」は一丁、「懷風藻序」
は二丁である。恐らく版木の確認の記載の為、『懷風藻』自
体の順番とは異なっているのであろう。「目錄」の五丁は合
っているが、「本文」の四十六丁というのは山脇重顯の「題
懷風藻後」の一丁を加えた丁数であろうと思われる。但し、
「艸書ニテ懷風藻と在外題」とあるのは、「天和二冊本」の
「懷風藻 金」「懷風藻 玉」という外題のことと思われる
が、「宝永一冊本」に「懷風藻 金」の外題が使用されてい

たことから「懷風藻 玉」の外題も含まれるか否かは不明
である。「楷書ニ而懷風詩集と在外題」とあるのは「宝永二
冊本」の「本朝 懷風詩集 乾」「本朝 懷風詩集 坤」の
外題であろうと思われる。この外題を一丁として計算した
ものとすれば「五十五丁」と一致する。

『蔵板記』の「羅山先生跋文入」というのは上田秋成の
「懷風藻跋」のことであろう。秋成の「懷風藻跋」は始め
に「羅山文集」五十五卷よりの引用があつて後「右見羅山
文集第五十五卷。余嘗聞之 云々」と私見を述べているか
らである。

さて版元の「竹苞樓」については言及する必要はないで
あろう。萬屋喜兵衛の演古堂については先にのべた。富田
屋弥兵衛については不明であるが、書肆であつたならば享
保以降、廃業でもしたのであろうか。そうだとするならば
その際に多くの版木が富田屋弥兵衛に渡り、錢屋惣四郎の
手に入ったものと思われる。

「宝永本」でも、頭注が付された以外に本文の異同があ
つたが、「寛政本」に於いてもかなりの異同が見られる。(校
異表参照)

「宝永本」における異同と比較すると墨格の修正が多か
つたのに対して「寛政本」の修正箇所は「一本」による校

異が多い。

それでも墨格の⑩(21オ・二・112)と⑪(24ウ・八・14)はそのままである。先に「葛野王」の小伝部分のについて、「刊本」に於ける本文への執着についてその訳は不明と述べたが、ここでも二箇所墨格をそのままにした事の疑問が残る。当然、修正されてもおかしくは無いと考えるのであるが、奇妙に思われる箇所である。

「寛政本」の大きな特徴は、頭注の増減の激しさである(「懐風藻刊本頭注増減一覽」参照)。徐々に減ってはいくものの、なかには一度削った頭注を再度入れ木によって彫補している箇所も見られるのである。

現在確認出来ている「寛政本」は宮内庁書陵部蔵本・静嘉堂文庫蔵本無量院本・静嘉堂文庫蔵本・国文学研究資料館蔵中田光子旧蔵本・都立中央図書館蔵本の五種類である。以下、出版順序について、頭注をもとに考察を加える。

先ず、本文七ウに「施或作櫓」の頭注が宮内庁書陵部蔵本にはあるが、他の四本に於いては不完全な形で削られている。即ち頭注の枠の下部と「作」の字の下部とが削り残した形になっているのである。次に二十九オの「博字上脱學字」の頭注が文字は「宝永本」と同じであるのに、四周双辺の部分も含めて、宮内庁書陵部蔵本においては入れ木

によって彫補されているが、静嘉堂文庫蔵無量院本では四周双辺の部分に斜めに切れ目が確認出来る。恐らく静嘉堂文庫蔵無量院本に於いて何らかの理由によって一度削られて、再び同じ頭注が入れ木されたものと思われる。他の三本においては斜めの切れ目より上部が削り取られているのである。又、八オの「天子之詩本朝文武之始」が宮内庁書陵部蔵本・静嘉堂文庫蔵無量院本共に有るが、他の三本には頭注の枠の一部がわずかに残っているだけである。

次に、十三ウの頭注「漚或作浪」であるが、中田光子旧蔵本においては七ウの頭注と同じように不完全な形で削られている。五種類の「寛政本」の内、この箇所が削られているのはこの中田光子旧蔵本だけである。又、都立中央図書館蔵本に於いては、削られた「漚或作浪」の頭注の上に同じ頭注が継ぎ足されて彫補されているのが明確に判る。即ち、都立中央図書館蔵本の方が中田光子旧蔵本より後印ということになる。

他に一本、静嘉堂文庫蔵本があるが、十ウ「上目作下古麻呂者麻呂之子」・十二ウ「老人出百濟國」・十三ウ「漚或作浪」・十四ウ「左字下大字脱」の頭注があることから宮内庁書陵部蔵本・静嘉堂文庫蔵無量院本」に続く位置に置くことが可能と考えられる。以上のことから「寛政本」五種類の印行順序を推測すると、宮内庁書陵部本・静嘉堂文庫

藏無量院本・静嘉堂文庫藏本・国文学研究資料館藏中田光子旧藏本・都立中央図書館藏本となる。今、これを順次、甲・乙・丙・丁・戊本とする。以下各「寛政本」について概説するが、「寛政本」には重版の発行に際して、これだけ監修者がいたということになる。それが、上田秋成であったかもしれないし、「竹苞樓」の文人との交流の広さを考えると常に助言をあたえた人物がいたのかもしれないし、さらには「竹苞樓」主人の銭屋惣四郎自身が手を加えていたのかもしれない。

甲本

「竹苞樓」が最初に上梓したと思われるだけあって、実に堂々とした感のある一本である。見返は「本朝古賢名選／懷風藻／平安書肆 竹苞樓發兌」。見返の右上に「北極之象／大陰之精／鍾英育才／翼我文明」と篆書体の押印がある。更に、見返の「竹苞樓發兌」の上に「竹苞樓記」の朱印有り。調べた限りにおいてはこの二つの朱印を有するのはこの一本だけである。或いはこの一本は献上本であったかもしれない。五針袋綴。題簽は「懷風藻」の刷外題である。頭注は四十七箇所。

乙本 A

外題は甲本と同じ「懷風藻」の刷外題。四針袋綴。表紙は薄茶色地に濃茶色の横縞模様。甲本の「本朝古賢名選／

懷風藻／平安書肆 竹苞樓發兌」の内題が無く、上田秋成の「懷風藻跋」及び本文四十六ウの刊記によってのみ「寛政本」と確認出来る。頭注は四十六箇所。

乙本 B

右と表紙以外は全く同一の一本が長澤規矩也氏旧蔵に有る。この一本は薄青色の表紙であり、A本の大きさが横一六二ミリ、縦二五六ミリに対し、B本は横一八七ミリ、縦二六〇ミリである。

丙本 A

外題は甲・乙本と同じ「懷風藻」の刷外題。四針袋綴。表紙は薄茶色の横縞模様。甲本と同じ「本朝古賢名選／懷風藻／平安書肆 竹苞樓發兌」の内題が有るが、「北極之象／大陰之精／鍾英育才／翼我文明」の押印がない。「寛政本」との確認は乙本と同じく「懷風藻跋」及び刊記によるしかない。頭注は四十一箇所。

丙本 B

見返に内題の無い一本が東京大学に存在する。

丁本

丁本は奇妙な一本である。四針袋綴。外題は「宝永本」で使用された「本朝／懷風詩集 乾」「本朝／懷風詩集 坤」の乾・坤の文字を削除した刷外題である。しかも、内題も「宝永本」と同じ「本朝古賢名選／懷風詩集／書肆演古堂

壽梓」である。しかしながら、本文四十五ウに「天和四甲子正月碧鷄堂上梓／寶永二乙酉正月演古堂補彫／寛政五癸丑八月竹苞樓再校」の木記があり、上田秋成の「懷風藻跋」も有る。更に、裏表紙の裏に「寺町通本能寺前／皇都 錢屋惣四郎」の版元の印刷がなされている。頭注は三十七箇所。何故このような形態で出版されたのかは不明である。

当初は「竹苞樓」に於ける最初の出版本であって出版を急ぐあまり「宝永本」の内題及び外題を使用せざるを得なかったためかと考えられたが、富田屋弥兵衛から版木を購入したのが安永九年（一七八〇）であり、寛政五年（一七九三）まで十三年もブランクがあることを考えると、あながち出版をいそいだとも考えられない。ましてや頭注の増減などから丁本とせざるを得ないのである。

戊本

此の一本にも見返に内題がない。四針袋綴。乙本と同じ表紙である。残念ながら参考とした都立中央図書館蔵本には外題が取れてしまっているので、外題は不明である。頭注は三十八箇所。裏表紙の裏に「竹苞蔵板／寺町通本能寺前／帝都 錢屋惣四郎」とある。

註(1)、『竹苞樓大秘録』『藏板記』共に『若竹集』（昭和五十

年 佐々木竹苞樓刊）による。

九、結語

以上、『懷風藻』の「無刊記本」と「天和本」の種類及び特徴を一覧とすると次のようになる。

無刊記本

①甲 本 「序」二丁、「目錄」五丁、「本文」四十五丁、

欠字二十三箇所。頭注無し。四針袋綴。

②乙 本 右以外に見返に「碧鷄堂」の内題有り。五針

袋綴。

天和四年修本

①甲本A 四針袋綴、本文十六丁より下巻となる。見返

に「碧鷄堂」の内題有り。山脇重顯の「題懷

風藻後」一丁を有し、末尾に「天和四年」の

刊記有り。本文十六丁より下巻となる。

②甲本B 五針袋綴、本文十七丁より下巻となる。以下

甲本Aに同じ。

③甲本C 五針袋綴、本文十九丁より下巻となる。以下

甲本Aに同じ。

④乙 本 五針袋綴、墨格が一箇所少ない。十七丁より

下巻となる。以下甲本Aに同じ。

宝永二年修本

①甲 本 四針袋綴、頭注四十七箇所。題簽は「本朝／

懷風詩集 乾」「本朝／懷風詩集 坤」の刷外題。見返に「演古堂」の内題有り。巻頭に松崎祐之の「懷風詩集序」一丁を有す。「題懷風藻後」の末尾に「宝永二年」の刊記有り。

②乙本 四針袋綴、頭注四十四箇所。題簽は行書体で「懷風藻 金」「懷風藻玉」の刷外題（「天和本」に同じ）。以下甲本に同じ。

寛政五年修本

①甲本 五針袋綴、頭注四十七箇所。題簽は楷書で「懷風藻」の刷外題。見返は「本朝古賢名選／懷風藻／平安書肆 竹苞樓發兌」。巻頭に松崎祐之の「懷風詩集序」一丁。山脇重顕の「題懷風藻後」一丁。の他に上田秋成の「懷風藻跋」二丁を有す。跋の末に「寛政癸丑秋 攝津 阮

秋成誌／平安 竹苞樓藏板」と有り。本文四十五丁裏に「天和四甲子正月碧鷄堂上梓／寶永二乙酉正月演古堂補彫／寛政五癸丑八月竹苞樓再校」の木記を有す。

②乙本A 四針袋綴、頭注四十六箇所。見返は無し。以下甲本と同じ。

③乙本B 表紙は薄青色。以下はA本と同じ。

④丙本A 四針袋綴、頭注四十一箇所。見返も含め以下

甲本と同じ。

⑤丙本B 見返無し。以下はA本と同じ。

⑥丁本 四針袋綴、頭注三十七箇所。題簽は「宝永本」甲本で使用された「本朝／懷風詩集」の「乾」

「坤」の文字を削除した刷外題。見返の内題も「宝永本」と同じ。「本朝古賢名選／懷風詩集／書肆演古堂壽梓」。裏表紙裏に「寺町通本能寺前／皇都／錢屋惣四郎」と有り。以下は甲本に同じ。

⑦戊本 四針袋綴、頭注三十八箇所。外題不明。裏表紙の裏に「竹苞藏板／寺町通本能寺前／帝都

錢屋惣四郎」と有り。以下甲本と同じ。

右の如く、「懷風藻」の刊本は十五種類が識別できる。換言すれば最低十五回に渡って出版が繰り返されたということである。これは当時としては、ベストセラーの一つであったろうことは、「古言梯」や『訂正古訓古事記』等の版種と比較しても想像のできることであらう。又、『曆朝詩纂』（宝暦七年刊）、『日本詩史』（明和八年刊）、『皇朝正聲』（明和八年刊）、『日本詩選』（安永三年刊）、『大和風雅』（安永九年刊）、『日本詩記』（天明六年刊）等の『懷風藻』の作品を含む日本漢詩のアンソロジーが次々と出版された背景の一助となったことも否めないと考えられる。

但し、当然のことながら、「無刊記本」の出版にあたって、その底本となるべき一本が有つたはずであるが、現存する写本の中にその存在を確認できていない。当時としてはかなり多くの写本が存在していたであろうことは、例えば、先に記した『紀州家本』における「西三条實隆定本」や『南畝文庫藏書目録』に「竜門劉氏本」の『懷風藻』一卷がある事、及び『懷風藻箋註』には現存していない本との校異が見られることなどから、大概の文人の蔵書に『懷風藻』の写本があつたであろうと考えられる。又、国立国文学研究資料館のマイクロフィルムにも一般には知られていない写本が増えつつ有ることなどから、今後も写本の発見には期待がもたれるであろう。いづれ岡田正之が「現に藏せりと聞(註③)」き、澤田總清が「徳島の文庫にも藏して居ない」と言(註②)う。「屋代弘賢本」も発見されるかもしれない。

又、本稿を脱稿するにあたり、まだまだ論を成すには資料不足であることも否定できない。十五種類以外の刊本の存在するであろうことは筆者も十分に承知していることであるが、一先ずの区切りとしてこれらの資料を分類したままである。又、A B及びCと分類した本については細分する必要性が無いという考えも文学上あろう。従つて、今後本稿を訂正増補することも充分にあり得るし、序にも述べたとおり、校本の存在しない『懷風藻』であるが、漢文学、特

に近世漢文学の隆盛の目立つ今日に於いて、新資料の発掘も徐々にはあるが進みつつある。校本の成立もそう遠くはないと考えるし、稚拙な本稿がその際にいささかの役にたてば幸いと考える。且つ、多くの教えを乞う次第である。尚、本稿を記すに当たり、書誌学的用語・用法については極力慎重を期したつもりである。そのために参考としたのは『古書のはなし―書誌学入門―』（長澤規矩也氏著 富山房 昭和五十一年刊）と『日本書誌学用語辞典』（川瀬一馬著 雄松堂出版 昭和五十七年刊）等である。特に長澤規矩也氏の著作は他にも参考とした。

註(1)、拙稿『懷風藻箋註』考』『上代文学』第五十六号

(2)、岡田正之氏『近江奈良朝の漢文学』（引用は昭和二十二年、養徳社刊によるが、先に東洋文庫論叢の内の一冊として昭和四年に出版されている。）。

(3)、澤田總清氏『懷風藻註釋』（昭和八年、大岡山書店刊）。

本稿を成すにあたり、辰巳正明氏、平林盛得氏、長澤孝三氏、大沼晴暉氏、増田はるみ氏を始め、各図書館・文庫の方々に大変ご迷惑をおかけした。記して感謝致したい。尚、本稿の内、「無刊記本」「天和本」については平成元年十二月の上代文学会例会において『懷風藻刊本の研究（無刊記本から天和刊本まで）』と題して発表した内容を加筆訂正したものである。

無刊記本 甲本	無刊記本 乙本	天和本 甲本	天和本 乙本	宝永本 甲本	宝永本 乙本	寛政本 甲本	寛政本 乙本	寛政本 丙本	寛政本 丁本	寛政本 戊本	No.	箇所
											×	×
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	2	序 乙才②
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	3	序 乙才③
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	4	序 乙才④
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	5	序 乙ウ①
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	6	序 乙ウ②
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	7	序 乙ウ③
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	8	序 乙ウ④
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	9	序 2才
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	10	乙ウ
×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	11	5ウ
×	×	×	×	○	○	○	×	×	×	×	12	7ウ
×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	13	8才
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	14	9才
×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	15	10ウ
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	16	11才
×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	17	12ウ
×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	18	13才
×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	○	19	13ウ
×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	20	14ウ
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	21	19才
×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	22	20才
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	23	20ウ
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	24	22ウ
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	25	24才①
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	26	24才②
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	27	26才①
×	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	28	26才②
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	29	27ウ
×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	30	29才
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	31	29ウ
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	32	30ウ
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	33	32才①
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	34	32才②
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	35	32ウ
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	36	33才
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	37	33ウ
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	38	35ウ
×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	39	36ウ
×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	40	37ウ
×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	41	40才①
×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	42	40才②
×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	43	40ウ①
×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	44	40ウ②
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	45	40ウ③
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	46	41ウ①
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	47	41ウ②
×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	48	42ウ
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	49	43才
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	50	43ウ
×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	51	44ウ

懷風藻千日本豆貝主増減一覽

No.	箇所	頭注内容
1	序 乙オ①	橿原者神武帝都 品田者譽田帝即應神譽或作品
2	序 乙オ②	應神帝十五年百濟貢真馬其使阿直岐能讀經典
3	序 乙オ③	敏達帝時高麗上表書于烏羽辰尔解之
4	序 乙オ④	王仁百濟王子菟道稚郎子師
5	序 乙ウ①	輕島應神帝都
6	序 乙ウ②	王辰備百濟人
7	序 乙ウ③	譯語田者敏達帝都
8	序 乙ウ④	龍潛王子大津皇子也
9	序 2オ	鳳皇天皇文武帝也神納言高市麻呂也藤太政廳史也 雲鶴月舟白鬢玄造昔詩中之語
10	乙ウ	沙宅塔本地名相明春初人名吉太以下十字未考
11	5ウ	媽或作孀
12	7ウ	棉或作櫛
13	8オ	天子之詩本朝文武乃始
14	9オ	大神或三輪大神氏出自事代主神
15	10ウ	上目作下古麻呂者麻呂之子
16	11オ	淨麻呂出天河田奈命
17	12ウ	老人出百濟國
18	13オ	有或作濟
19	13ウ	漚或作浪
20	14ウ	左字下大字脫
21	19オ	一作肥前守
22	20オ	長下當有屋字一本有之以下當做此
23	20ウ	時字下脫也字
24	22ウ	大字下脫學字
25	24オ①	五十九或作五十七
26	24オ②	下或作卜
27	26オ①	目錄作讀岐守外從五位下田中朝臣清足
28	26オ②	右目作左
29	27ウ	目作雄人年五十七
30	29オ	博字上脫學字
31	29ウ	圖書頭目作内業正
32	30ウ	雞或作齊
33	32オ①	藤原下脫朝臣字
34	32オ②	三十四一作四十四
35	32ウ	海盡善盡義對曲裏之雙流是日也人乘芳夜以上十八字當在時屬之上
36	33オ	箇字下脫之字
37	33ウ	人字下脫之字
38	35ウ	京字下脫大字
39	36ウ	一本無吾婦下有數字君道以下自作一章宜擯頭
40	37ウ	着疑看誤
41	40オ①	至以左三字未詳
42	40オ②	陽春出朝鮮國
43	40ウ①	等或作尊未詳
44	40ウ②	草疑花誤
45	40ウ③	武内苗裔古目作吉
46	41ウ①	野見宿禰之後
47	41ウ②	草或作真
48	42ウ	乙麻呂本姓物部
49	43オ	遠字下脫遺字
50	43ウ	年字下疑有脫字
51	44ウ	廣成一姓白猪出周國

